

## 看護学生が臨地実習中におこなっている自己評価の視点

石井 あゆみ

### 要 旨

看護師になるための学習には、病院などの学校外の施設へ行っておこなう臨地実習がある。臨地実習では自分の行った援助や看護場面を思い起こし、患者の言葉や態度、観察された内容に基づいて自己の評価を行っていく。多くの学生は青年期後期にあり発達の途中であることから、自己評価が過小であったり、逆に過大であったりする。そこで本研究の目的を、臨地実習中に学生がどのような視点で自己評価を行っているのかを把握し、今後の臨地実習指導の示唆を得ることとする。

方法は、2014年12月A短期大学3年生で領域別実習・総合実習を終えた看護学生に対し無記名で質問に自由記述してもらった。結果は、「楽しかったこと」は、【患者との関わり】、【自分の達成感】、【グループとの関わり】の3つのカテゴリに、「つらかったこと」では【記録のため眠れない】、【自己管理ができない】、【インシデント】、【周囲の人とうまくいかなかったとき】、【患者との関係】の5つのカテゴリに分かれた。

グループ間で対話することで学びを共有する機会や、グループ内の関係性を構築するかかわりを持ち、他者との評価基準の違いやそれぞれの評価の視点の違いから、自己評価能力を発展させていく関わりを持つことが重要であると示唆された。

Keyword: 看護学生、臨地実習、自己評価

### 1. はじめに

看護師になるための学習には、机上の学習ばかりではなく病院などの学校外の施設へ行っておこなう臨地実習がある。臨地実習は、約6ヶ月間の期間おこなわれ学内の良く知った友達同士で学習するのではなく、3~6人のグループに分かれグループ内の情報共有に加え、病院の臨床指導者ならびに学内の指導教員と密にコミュニケーションを取り合いながら、入院患者を受け持ち、看護を学習していく。そして、学習課題も多く提出しなければならないレポートも多く、学生にとっては学校の中での学習とは違う環境下でよい人間関係を築けるようコミュニケーションをとりながら実習を行うため、ストレスフルな状況にある<sup>1)</sup>。

看護学生の全てが当てはまるわけではないが、臨地実習中の時間の自己管理は難しくうまくいかなくなる学生が多い。睡眠時間を削りレポートを書いていると、体調を崩して学習意欲が低下し、臨床指導者から質問されても適切に答えられなくなる。そして自分から意欲的に困難な場面に立ち向かい、困難な状況を変えていこうと試みることができず、何に対しても諦めてしまい、ますます学習意欲をなくすことになる。

臨地実習では自分の行った援助や看護場面を思い起こし、患者の言葉や態度、観察されたことから自己の評価を行っていく。学生の自己評価のプロセスとして、まず知識面として基本的な体の仕組みや疾

病の知識に加えて、心理面など臨床の指導者や担当教員、グループのメンバーなどからの助言も受け、自己の評価方法について基準が作り出されていくと考えられる。実際には臨地実習で自己評価の対象となるものは患者との関わりだけでなく、グループメンバー同士で助け合って実習することができたかや、報告・連絡・相談が適切にできたか、積極的に意欲的に、また健康に注意して遅刻や欠席することなく実習に臨めたかなども評価対象となる。多くの評価対象があるが、多くの学生は青年期後期にあり、心理基盤の発達の途中にあるため、自己評価が過小であったり、逆に過大であったりもする。適切な自己評価ができるように指導方法を工夫することが今後の課題と考える。そこで、学生が臨地実習中にどのような視点で自己評価を行っているのかを把握し、今後の臨地実習指導の示唆を得ることを本研究の目的とする。

### 2. 研究方法

まず、臨地実習中に学生自身がどのような視点で自己評価を行っているのかを知るために、領域別臨地実習、総合実習を終えたばかりの看護学生3回生20名にアンケートを行った。

調査内容はA短期大学の看護学生に対して、臨地実習でどのような体験を経験した時に達成感を感じるのか否か、実習目標を達成するのが難しいと感じるのかについて回答を求めた。これは自己の評価を

行うときには、自分の行為が「できた」と達成感を感じるのはどのような時か、または達成するのが難しく「できなかった」と感じるのはどのような時かについて知るためである。感じていることをありのまま表してもらうため自由記述式とした。

実際の文章は、「今後の A 短期大学領域別看護学実習をより充実させるため、以下のアンケートにご協力ください。」と依頼し、「1. 実習で一番楽しかったことや達成感のあった出来事を教えてください。」「2. 実習で一番つらかったことやもう少し頑張ればできたなと思う出来事を教えてください。」の 2 つの項目について病院実習が終了した翌日の学内実習日にアンケートを依頼し、20 名全員的回答用紙を回収した。

### 3. 倫理的配慮

対象者には、研究参加について文章と口頭で説明し依頼を行った。依頼内容は、研究の目的と意義、協力は自由意思に基づくものであり、隨時同意を撤回することが可能であること、その場合でも何ら不利益を被ることはないこと、個人情報は個人が特定されないように守秘し、本研究の成果の報告をもってすべての情報を破棄することを説明した。

### 4. 調査結果

A 短期大学の 3 回生、領域別実習・総合実習を終えた看護学生 20 名のアンケートを配布・回収した。回収率は 100% であった。記述された内容を質的帰納法により分析した。場面の意味を損なわないように整理しコードを作成、内容を解釈し、類似性のあるものでまとまりを作りサブカテゴリを命名した。コードからサブカテゴリ、カテゴリと抽象化を進めた。データ収集、分析過程において、本研究の指導者の助言を得て評議を繰り返し、信頼性を高めた。

質問の「1. 実習で一番楽しかったことや達成感のあった出来事を教えてください。」(以下、「楽しかったこと」と略す) では総コードが 32 コード、12 サブカテゴリと 3 つのカテゴリが抽出された。「2. 実習で一番つらかったことやもう少し頑張ればできたなと思う出来事を教えてください。」(以下、「つらかったこと」と略す) では総コードが 35 コード、16 サブカテゴリと 5 つのカテゴリが抽出された。カテゴリを【】で、サブカテゴリを <> で示す。

「楽しかったこと」では、一つ目に【患者との関わり】のカテゴリで《学生の存在を喜んでくれた時》、《患者とコミュニケーションをとったり、笑顔が見れた時》、《患者の状態が回復へ向かった時》、《患者のできないことができるようになり達成感を感じた時》

の 4 つのサブカテゴリが 11 コードから抽出された。看護学生は、患者と関わりを持てたことが実習中の楽しい出来事と捉えられている。二つ目の【自分の達成感】では《パンフレットの作成やケアを実施して感謝された》、《ありがとうと言われた時》、《患者と話している時》、《褒められた時》、《難しいと思っていたことができた時》、の 5 つのサブカテゴリが 16 コードから抽出された。看護学生は、実習中に自分が行ったことがうまくいき楽しかったことと捉えられた。また三つ目の【グループとの関わり】のカテゴリでは《学びを共有できた時》、《グループでチームワークが良く実習できた時》、《グループで喜べた時》の 3 つのサブカテゴリが 5 コードから抽出された。このカテゴリではグループのメンバーと共に実習できたことを楽しかったことと捉えられている。結果を Table1 に示す。

Table1 「楽しかったこと」のカテゴリ化

カテゴリ	サブカテゴリ	コード数
患者との関わり	学生の存在を喜んでくれた時	3
	患者とコミュニケーションをとったり、笑顔が見れた時	2
	患者の状態が回復へ向かった時	2
	患者のできないことができるようになり達成感を感じた時	4
自分の達成感	パンフレットの作成やケア実施をして感謝された	4
	ありがとうと言われた時	3
	患者と話している時	4
	褒められた時	1
グループとの関わり	難しいと思っていたことができた時	4
	学びを共有できた時	1
	グループでチームワークが良〈実習できた時	2
	グループで喜べた時	2

次に「つらかったこと」は、一つ目に【記録のため眠れない】のカテゴリでは《疲れなかったこと》、《記録に時間がかかったこと》、《記録や学習の時間配分が難しかったこと》、《記録ができずついて行くのに必死》、《記録の書き方が良く分からなかったこと》の 5 つのサブカテゴリが 16 コードから抽出された。学習時間が思うように使えない結果、睡眠時間が削られていることがつらい体験と捉えられていると伺える。二つ目に【自己管理ができない】のカテゴリでは《自分自身の行動がうまくいかなかったこと》、《時間や体調の管理がうまくいかなかったこと》、《事前学習が不足していたこと》、《もっと現場で学びたかった》の 4 つのサブカテゴリが 8 コードから抽出された。ここでも自分自身の時間を実習時間だけでなく自宅に帰ってからもどう活用すれば効率よく学習できるのか、また目的を達成することができるのか悩みながら実習に臨んでいることと捉えられ

る。三つ目に【インシデント】では、《インシデントレポートの指導を受けている時》、《インシデントを起こしてしまったこと》の2つのサブカテゴリが4コードから抽出された。実習前に注意するように言われていたが、事故につながるかもしれない行動をとってしまい、報告書を記入していることがつらい体験として捉えられている。四つ目に【周囲の人とうまくいかなかったとき】では、《学生同士の関係がうまくいかなかったとき》、《教員との関係がうまくいかなかったとき》、《指導者との関係》の3つのサブカテゴリが4コードから抽出された。ここでは実習中に関わる周囲の人たちとうまく関係性を築くことができなかつたことがつらいことと捉えられている。五つ目に【患者との関係】では、《患者との関係がうまくいかなかったとき》、《患者への援助がうまくいったかわからなかったとき》の2つのサブカテゴリが3コードから抽出された。患者との関係性を築くことができなかつたことがつらいことと捉えられている。結果をTable2に示す。

Table 2 「つらかったこと」のカテゴリ化

カテゴリ	サブカテゴリ	コード数
	眼れなかつたこと	3
	記録に時間がかかつたこと	3
記録のため眠れない	記録や学習の時間配分が難しかつたこと	5
	記録ができづついで行くのに必死	2
	記録の書き方が良くなからなかつたこと	3
自己管理ができない	自分自身の行動がうまくいかなかつたこと	2
	時間や体調の管理がうまくいかなかつたこと	2
	事前学習が不足していたこと	3
	もっと現場で学びたかった	1
インシデント	インシデントレポートの指導を受けている時	3
	インシデントを起こしてしまったこと	1
	学生同士の関係がうまくいかなかつたとき	2
周囲の人とうまくいかなかつたとき	教員との関係がうまくいかなかつたとき	1
	指導者との関係	1
	患者との関係がうまくいかなかつたとき	2
患者との関係	患者への援助がうまくいったかわからなかつたとき	1

「楽しかったこと」では、【患者との関わり】、【自分の達成感】、【グループとの関わり】の3つのカテゴリに分かれた。「つらかったこと」では5つのカテゴリに分かれたが、【記録のため眠れない】、【自己管理ができない】、【インシデント】の3つは自分自身のうまく行かなかつた体験であり、「楽しかったこと」の【自分の達成感】と同じような視点で捉えられている。【周囲の人とうまく行かなかつたとき】はグループメンバー以外の人をも含めた実習に関わる人たち

との関係性についてカテゴリ化されたもので、「楽しかったこと」の【グループとの関わり】と同じような視点で捉えられている。【患者との関係】では患者との関係性についてであり、「楽しかったこと」の【患者との関わり】と同じような視点で捉えられているように思う。看護学生が実習において達成感を感じるか否かの視点として【患者との関係】、【自分の達成感】、【グループとの関係】があることがわかった。

「楽しかったこと」と「つらかったこと」についてそれぞれ【患者との関係】、【自分の達成感】、【グループとの関係】の比較をしてみた。「楽しかったこと」では【患者との関係】と【自分の達成感】はそれぞれ34.4%と50.0%であったが、「つらかったこと」では【患者との関係】はわずかで8.6%であるが、【自分の達成感】は多数のコード数があり80.0%と大きな割合を占めている。これは、実習において患者との関わりがうまく行ったり、自分の達成感を感じたりすると楽しく充実した実習ができたと捉えられ、逆に自分の学習がうまく進まず効果的に実習ができなかつたり、他者との関わりというよりは自分の行動がうまく行かなかつたときにつらい実習であったと捉えられている。

【グループとの関係】では、「楽しかったこと」と「つらかったこと」についてそれぞれ15.6%と11.4%であり同じような割合であった。

結果をFigure1に示す。

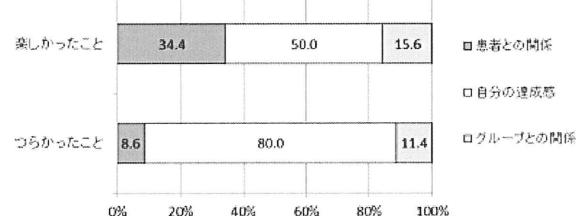


Figure 1 「樂しかったこと」と「つらかったこと」の比較

## 5. 考察

今回の調査は、臨地実習中にどのような視点で自己評価を行っているのかを知り、今後の臨地実習指導の示唆を得ることが目的であった。

アンケートの結果から、「楽しかったこと」と「つらかったこと」についてそれぞれ実習において患者との関わりがうまくいったり、自分の達成感を感じたりすると楽しく充実した実習ができたと捉えられ、逆に自分の学習がうまく進まず効果的に実習ができなかつたり、他者との関わりというよりは自分の行動がうまく行かなかつたときにつらい実習であったと捉えられていた。

丸茂・河部(2009)は、自己教育につながる自己評価のあり方として、看護場面とその評価過程の対

象化、自身の評価基準の自覚、患者の健康状態の好転への寄与を自問自答することの必要性を示唆している。また、対象化した思考過程を他者と共有し、対話を繰り返すことにより自己評価能力が発展していくと述べている<sup>2)</sup>。

【自分の達成感】について、自己管理、自己の行動の反省など自分自身への振り返りの内容が「楽しかったこと」、「つらかったこと」のどちらともコード数が多く、自身の評価基準を今までの学校生活とは違うものに置き換えられるように自身の行動に注目しているからではないかと推察される。臨地実習の学習成果を得られるよう教員や臨地実習指導者、患者からの評価に敏感となり、緊張も高くなると予測される。しかし、学校生活の中では体験できないことを「できた」と認められたときに達成感を感じ充実した実習と感じていると考えられる。中でも、【患者との関係】がうまくいくと達成感が大きく、コード数も多く自己の評価として自覚されたと考える。

また、患者の健康状態の好転への寄与を自問自答することの必要性<sup>2)</sup>とあるが、看護学生が行える看護援助には限界があるため、健康状態の好転について関わりを持てたかと自己の行動を振り返るには至っていない。臨地実習中に指導者や教員によって患者の健康状態の変化については指導を受けていると考えられるが、それを自己の評価対象とは自覚していないのではないかと考えられる。サブカテゴリに《患者の状態が回復へ向かった時》、《患者のできないことができるようになり達成感を感じた時》があるため、関心が向けられていないわけではないと思われるので、看護学生の行った援助について、患者の健康回復に役立てられたのかどうか、自覚できるよう指導していく必要がある。

【グループとの関係】では、「楽しかったこと」、「つらかったこと」ともにコード数が少なく、自己の評価対象として自覚されていないようと考える。対話を繰り返すことにより自己評価能力が発展していく<sup>2)</sup>とあるように、グループ間で対話することで学びを共有する機会や、グループ内の関係性を構築するかかわりを持ち、他者との評価基準の違いやそれぞれの評価の視点の違いから、自己評価能力を発展させていく関わりを持つことが重要であると示唆された。

## 6. 謝辞

本研究を行うにあたりご協力を賜りました A 短期大学の先生方ならびに看護学生の皆様、ご指導いただきました先生方に心より感謝申し上げます。

なお、本研究は大阪教育大学大学院教育学研究科

健康科学専攻修士論文の一部に加筆・修正したものである。

## 7. 参考文献

- 1) 毛利貴子、眞鍋えみ子：臨地実習中の看護学生におけるストレスコーピングと臨地実習自己効力感との関連、京都府立医科大学看護学科紀要、17,65-70 (2008)
- 2) 丸茂 美智子、河部 房子：実習体験に対して看護学生が行った看護場面の自己評価に関する研究－自己教育の観点からの検討－、千葉看護学会会誌、15(1),18-26 (2009)

受理 2016年3月30日

〈連絡先〉

石井 あゆみ

〒538-0053 大阪府大阪市鶴見区鶴見6-2-28

大阪信愛女学院短期大学

E-mail: a-ishii@osaka-shinai.ac.jp